

狐きつねさんの恋結び

第一章 狐の憂鬱^{ゆううつ}

実に虚^{むな}しいものだな、と六畳の和室に仰^{あおむ}向けに寝転がって狐は思った。

四月半ばに初の失恋をして以来、体も心もがらんどで何をする気も起こらない。音もおいも現実離れしているように感じられ、自分を取り巻く周囲すべてが張りぼてに見える。——いや、もしかしたら本当にすべて作り物で、次に目を覚ますと真^まつ暗闇^{くらやみ}の中にいるかもしれない。その暗闇こそ、世界の真実の姿なのだろうか。

そんなSF映画があつたなと思ひながら、試しに目を閉じると目蓋^{まぶた}の内側が薄明るかつたので、右腕を載せた。

狐というのはあだ名であつて、本名ではない。今では自ら狐と称し、葛^{くず}の葉^はの末裔^{うそぎ}だと嘯^{うそ}くこともあるが、元は小学校時代の同級生がつけた蔑称だつた。

小学校低学年の頃、手品を披露していたら同級生の一人に「人を化かす狐だ」と非難された。ガキ大将のその男は、皆が狐に注目しているのが面白くなかつたのだろう。元々人間不信の氣があり、同級生と話すのも苦手だつた狐は、たちまち一部の同級生たちから「狐」と呼ばれるよう

になった。ひよつとすると、右頬の火傷痕も原因だったのかもしれない。ほんの一月半ほど前に整形手術するまでは、右頬に狐の顔にも見えるケロイド状の痕があつたのだ。他の同級生たちも狐の手に飽きると離れていつてしまった。

ごろんと横向きになつたところで、チャイムが鳴つた。どうせ宅配便か宗教勧誘だと決め付けて無視していると、窺うようにもう一度、びんぼーん、とどこか間延びした音が聞こえてきた。

生憎自分は失恋して傷心中だ。おまけになにやらぼうつとして体に力も入らないし、無理に立ち上がると転んで頭をぶつける恐れもある。そうなると一大事だ。打ち所が悪ければあの世に行つてしまいかねない。ご足労にはご苦勞様と言いたいところだが、来訪者にしたつて、訪問相手が自分のせいで死んだとあつては、生涯良心の呵責に苛まれるに違いない。

悪いが帰ってくれたまえ、いくら粘つても自分は出んよ、と心の中で呟いて目を閉じた途端、

びぽびぽびぽびぽーん、とすさまじい勢いでチャイムが連打された。

あまりの騒々しさに狐は呻いて目を開けた。ただ給金を得るために働く労働者なら、こんな非常識な真似はするまい。さては近所の小学生が悪戯でもしているのか。それなら、放つておいてもじきに飽きてどこかに走り去つていくだろう。

ゆつくりと目を閉じた途端、狐は嫌な予感に襲われた。——門の鍵を掛けた記憶がない。

その懸念が正しかったことを証明するように、今度は玄関の引き戸が激しく叩かれた。放つておくと戸を叩き壊しかねない雰囲気だ。盗られて困るものがあるわけでなし、庭で勝手にうろちよろする分には構わないが、家を壊されるのは困る。

億劫だがやむなし、と判断して狐は上体を起こした。

鈍く痛む頭を押さえながら廊下に出ると、「狐、いるんだろう？」と聞き覚えのある声が聞こえてきた。嵌め殺しの擦りガラスの向こうには大きな人影がある。

自分を心配してやってきたのか。

いるよ、と答えたつもりだが、果たして声になったのかどうか。ともかく、戸を叩く音は止んだ。擦りガラス一枚挟んだ向こう側で、来訪者はじつと戸が開かれるのを待っている。正直、今は誰とも顔を合わせたくないが、ここでそう主張して引き下がるような相手ではない。

素足にサンダルを引つけて古い戸を引き開けると、長い黒髪を頭の高い位置で一つに束ね、大きなトートバッグを提げた女性が立っていた。黒のパンツにタートルネックの長袖と随分ラフな格好だが、それがスタイルのよさを際立たせている。

揚羽だ。

母親同士の仲がよく、互いに一人っ子だったこともあり、姉弟のように育った女性である。

揚羽は狐と顔を合わせるなり、「いるなら返事くらいしなよ」とぴしゃりと言った。

彼女の言うことは大抵的を射ている上、基本的にすべて自分のためを思つての言動と心得ている。感謝もしている。が、狐にだって一人にしておいてほしい時はある。

「不法侵入だぞ、揚羽さん」

サッシに寄りかかり、耳の後ろを掻きながら古びた門から玄関まで続く短い通路を見やると、「返事がないから、また倒れてるのかと思つて心配したんだよ」と言われた。実際、過去に熱を出して寝込んだ例があるし、今も立ち上がるのがやつとだった。反論できない。

俯いたまま、揚羽の黒いパンプスの先を眺めていると、「上がるよ」と一言断つて揚羽が脇を

すり抜けた。勝手知ったるなんとやらで、すたすた廊下を歩いて右奥の引き戸を開けて入っている。仕方なく、狐も頬を掻いて後に続いた。

台所でテーブルの上に料理の入った密封容器を出していた揚羽が、狐のほうを振り返る。

「あんたの好きなハンバーグ作ってきたから、一緒に食べよう」

ハンバーグは好物の一つだ。こくりと頷くと、揚羽が、よし、というようににつこりした。

揚羽は食が細いほうではない。正しい箸遣いで背筋を伸ばしてすすすと食べる様を見ていると、自然とこちらも箸が進む。もちろん、料理が旨いのも大きな要因だ。

「睡眠はちゃんと取れているのかい？」

「ずーっと頭に霧がかかったようになっていて、眠っているのか起きているのか分からない状態が続いている。今も体がふわふわして、まるで夢の中にいるようだ」

付け合せのポテトサラダをつつきながら正直にそう答えると、揚羽が眉をひそめた。狐自身、これが決して健康的な状態でないことくらい分かっている。

「雲の上を歩いているような感じだよ」と付け足すと、揚羽が溜め息を吐いて首を振った。

「お風呂にはちゃんと入ってる？」

「最後に入ったのはいつだったかな？」ととぼけて狐は首を傾げた。

そもそも毎日入浴するのが常識となったのは、ガス管や水道管の整備が進んで各家庭に風呂が設けられるようになった高度経済成長期以降のことで、まだ五十年も経っていない。平安貴族なんて月に数度沐浴するだけだったというし、江戸時代の銭湯だって膝あたりまでを湯につけて上半身は湯気で蒸すというのが主流で、全身湯に浸かる形態の共同浴場ができたのは明治に入って

からだ。

頭の中でそう弁解したが、口に出すだけの元氣はなかった。

「その分じゃ、掃除や洗濯はしてなさそうだね」

「ご明察、さすがは揚羽さん」

ぱちぱちと力なく手を叩くと、露骨に呆れた顔をされた。現代の文明人らしく健康かつ衛生的な生活を送る揚羽からしてみれば、今の狐はけしからんの一言に尽きるのだろう。

昼食後、揚羽に促されて洗濯物を出し、風呂で汗と垢を流して上がると、部屋が綺麗になつていた。六畳間の真ん中に敷いていた布団も見当たらず、途方に暮れて揚羽を見ると、「今、シートと枕カバーも洗濯してるから」と笑われた。

時空の狭間に取り残されたような古い日本家屋に揚羽の笑顔は眩しすぎる。

それはさておき、シートが乾くまで寝るなということか？

頭を緩慢に振って台所の椅子を引いて腰掛けると、狐は傷だらけのテーブルに肘をつき、両手で顔を覆って目を閉じた。

血縁関係はもちろん金銭による結びつきも一切ないのに、こうして料理や掃除をしてくれる女性、傍目にはどう映るのだろう。親きょうだいでも家政婦でもないとすると、やはり彼女だと判断するものなのか。あの女子大生も、そんなふうに考えて身を引いたようだった。

これまで狐に彼女と呼べる存在がいたことは一度もない。色恋沙汰に現を抜かす年頃になる前に火傷を負い、それが元で苛められ、人間不信に陥ってしまったのだから。やっと好意を寄せてくれる女性が現れたと思ったら、揚羽との仲を誤解して自分から去っていった。前世で自分はよ

ほど多くの女性を泣かせてきたに違いない。

いつの間にかテーブルに突つ伏して眠っていたらしい。「狐」と呼ばれて我に返った。

よくもまあこれだけ眠れるものだと我ながら呆れる。ひよつとすると失恋のショックで肉体が幼児退行しているのか？ 個人差はあるが、三歳までの乳幼児は一日平均十二時間以上も寝ているのだとか。一日の半分以上を寝て過ごすなんて、もったいない。

「晩御飯と明日の食事は冷蔵庫に入れておいたから」

さすがは揚羽さん、素晴らしい氣遣いだ。

へらりと笑うと心配そうな面持ちでじつと見つめられた。

「どうした、自分に惚れたのか？」

ふわあと太欠伸をして揚羽に向き直ると、「軽口叩けるくらいなら大丈夫だね」と返ってきた。

そう、そのとおり、軽口なのだ。たとえ地球が逆回転し始めたって、狐と揚羽がこれ以上の関係になることはない。

揚羽は実にいい女性だと思う。料理上手で優しく、顔立ちだつて整っている。本人に面と向かつて敬意や感謝を示すことは滅多にないが、狐は時々、揚羽は現代社会に舞い降りた天使ではないかと思う。あるいはマザー・テレサの生まれ変わりとか。

もし彼女を不幸にする男がいたら、本人や親戚一同に代わつて孫末代まで祟つてやりたい。だからといって、どういうわけか、自分が揚羽に相応しい相手だとは思えない。

年下の幼馴染がそんな物騒なことを考えているとは露知らぬ顔で、揚羽は「たまには外に出て歩きなよ」とか「家の中でじつとしてると、そのうちお尻から根っこが生えてくるよ」とか言

つて、ぺしゃんこになったトートバッグを提げて帰っていった。

通りの向こうの角を曲がって揚羽の姿が見えなくなるまで、狐は玄関の引き戸のサッシにもたれてまっすぐ伸びた背中を見送っていた。素顔に外の風が触れ、妙に心もとない気分になつて頬を擦る。触った限り違和感はないが、他人にはまだケロイド状の火傷痕が見えているのかもしれない。

悶々としたまま眠りにつくと、尻から根が生えて動けなくなった。どうやら太い根は布団を貫いて、畳の下まで伸びている模様。このまま夢の世界の住民になつてしまいたいと思いつつ眠りに就いたことは何度もあるが、意識もはつきりしているのに寢床に縛り付けられるのはまっぴらごめんだ。

さて、尻から根が生えた場合、医者か植木屋どちらを呼ぶべきなのだろう。しかし、この根つこをなんとかしなければ、起き上がって電話をすることもできない。

こういう時枕元に携帯電話があれば、と思いつつうんうん唸っているうちに目が覚めた。恐る恐る尻を擦ってみると、尾骨はあつたが根は生えていなかった。念のため頬も撫でてみたが、無精ひげがちくちくするだけだ。

こんな夢を見たのは、揚羽の言いつけを守らずに、自宅に引きこもっていたからだろうか。

遅い朝食を摂ろうと冷蔵庫を開けたところでチャイムが鳴った。また揚羽が来たのか。昨日隅々まで掃除して、今日の食事まで用意して帰ったのに、本当にご苦勞なことだ。

少々億劫に思いつつも迎えに出て、驚いた。予想に反して、目の前に立っていたのは白髪頭の

老人だったのだ。三月に大松明^{おおたいまつ}を見て気絶した時にも助けてくれた男性だ。住所を教えた覚えはないが、大方、狐^{きつね}が病院に搬送された後にも揚羽から聞いたのだろう。

「ええと……、米田^{よねだ}さん」

海綿状の頭から無理やり記憶を探り出して眩くと、老人が分厚い眼鏡^{めがね}を押し上げながら「飯田^{いいた}だよ」と苦笑した。確か食に関する名前のはずと思ったが、微妙に外してしまった。

「その後どうしたのかと思つてね」と飯田さんは人の良さそうな顔で笑つた。

己の身を案じて来てくれた人を無下^{むげ}に追い返すほど、狐は薄情ではない。

狐はちよいと頬を搔いてから、「お蔭^{かげ}様で、元氣ですよ」と笑つてみせた。ちゃんと笑えている自信はなかったが、飯田さんは「それならよかった」と安心したように頷いた。

「頬の傷、消したんだね」

一瞬どきりとしたが、「ええ。あの後、運び込まれた病院で整形手術を受けました」と平気な顔で応じると、「今のほうがいいよ」と頷かれた。

「いつも面を被^{かぶ}っていたから氣付かなかったが、なかなか男前じゃないか」

その言葉には苦笑するしかなかった。一番そう言ってもらいたかった相手からは振られてしまったし。

「そういえば、この間、君といつも一緒にいた女の子と偶然逢つたよ」

飯田さんは絶妙のタイミングで話題を変えた。軽い口調からして、飯田さんは狐と件^{くだ}の女子大生の間にあつたやり取りを知らないようだ。

狐は平静^{へいぜい}を装つて、へえ、と相槌^{あいづ}を打つた。

「散歩の帰りだったから、商店街の喫茶店でちよつとお茶したんだ。なんでも駅前の居酒屋でアルバイトを始めたらしいよ。今度いらして下さいって笑ってた」

笑っていたということは、彼女はもう立ち直ったのか。あるいは、元々自分のことなんてさほど重要ではなかったのかも。

胸の奥から黒くどろりとしたものが溢れ出そうになって、狐は強制的に思考を打ち切った。今や、彼女は自分とは無関係な世界の住民となつたのだ。

ユークリッド平面において、平行でない二直線は一点でしか交わらない。個人の人生を一本の直線状の道に例えた場合、狐と彼女の道が交わることは二度とないのだ。次元を拡張して考えると、最初から狐と彼女は別世界の住民だったという可能性も出てくる。三次元空間においては、二直線が平行でないにもかかわらず決して交わらない、すなわち二本の直線が同一平面上に存在していない、ねじれの関係というものがある。

揚羽が作り置きしてくれていたご飯で朝食を済ませると、狐は久々に外出用の着物を引っ張り出した。今朝までは一生太陽の光を浴びられなくてもいいと思っていたが、体から根が生えるのは困る。根はともかく、キノコくらいは本当に生きてきそうだ。

幸いと言うべきか、外は快晴だった。玄関の引き戸を開けた途端、白い陽光が目飛び込んできて回れ右したくなった。薄暗くじめじめしたところを好むなんて、それじゃあまるきり菌類だ。自分はよくても、次に揚羽が来た時狐がキノコと一体化していたら驚くに違いない。それはさておき、キツネとキノコ、こうして並べてみると似ているな。

奈良は森林浴、日光浴、そして鹿の觀察に最適の土地だ。東大寺とうだいじの参道は今日も人と鹿で賑にぎわつていて、下駄を鳴らしながら歩いていくと、四方から好奇の視線が飛んできた。

自分の顔に妙なものでもついているのか、ひよつとしたらついに何かが生えてきたのかもと思つたが、頭にも尻にも違和感はない。とすると、着物が珍しいのか。しかし、諸君、男の着物姿なんぞ見て何が楽しいのかね。

見ず知らずの通行人にじろじろ見られていると、一月半ほど前に人に譲った狐面が恋しくなつてきた。火傷痕もなくなつたことだし自分にはもう面なんて必要ないと判断したのだが、あれは早計だったか。

似たような面があれば買おうかと土産物屋みやげものやを覗き込んだが、どの店の軒先もせんとくんや鹿の玩具に占領されていた。彼らの外見が愛くるしく購買欲をそそのめるのは分かるが、大人の男がせんとくんのお面をつけて歩くのはいかなものか。

やはり伏見稲荷ふしみいなりに面を調達しに行かねばならんかなと考えていると、店の奥から「いらつしやいます」と声が飛んできて、狐は慌あわてて土産物屋の前から離れた。

大仏殿交差点から春日大社かすがたいしやの表参道へ続く小道に入る。左右を背の高い木々に挟まれた小道は、陽光からもアスファルトの放射熱からも逃れてひんやりしている。

表参道でまた見知らぬ子供や外国人に無遠慮な視線を向けられるかと思うと憂鬱ゆううつだ。俯うつきがちに歩いていると、

「狐！」

と向こうから声が聞こえた。

狐をそう呼ぶ人は限られているが、こちらを見て笑っているライトブルーのシャツを着た青年に見覚えはない。

聞こえなかつたふりをして通り過ぎると、「こら、無視すんな」と呼び止められた。

嫌々ながらも振り向くと、男性は「僕のこと、覚えてへんか？」と言ってきた。

「烏や」

「ああ！」と狐は手を打った。

烏なら、確かに自分の知り合いだ。

烏は烏丸何某からす まるにがといって、狐の中学一、二年の頃の同級生だった。当時すでに人間不信と頬の傷へのコンプレックスを抱えていた狐に対し、唯一親しげに話しかけてきた奇特な男で、烏というのも「お前が狐なら、僕は烏だな！」と自らつけたあだ名である。

はぐれ者に近付くとそいつも不遇に苦しむことになりそうなものだが、烏に限ってそれはなかった。中学入学と同時に彗星すいせいのごとく現れた彼は、中二の三月末に突然転校するまでクラスの人氣者であり続けた。彼が転校する間際に、クラスの女子たちが告白すべきか真剣に話し合っているのを見た覚えがある。

そうと分かってまじまじ見ると、目元や鼻あたりに当時の面影が残っている。

「こつちに戻ってきていたのか」

しみじみ言う、「お前はずつとこつちにいたんやな」と返された。狐は中学時代の同級生と一切連絡を取っていないので、烏も狐の現状を知らないようだった。狐が引きこもりになったのは烏が転校してからなので、烏はこれも知らないはずだ。

これから参拝に行くんだろう、だったら僕も行く、と烏は狐についてきた。

「参拝してきたんじゃないのか」

あの長い参道をまた歩くつもりかと示唆しきしたつもりだったが、烏は「してきたけど、何回参拝しても罰は当たらんやろ」とあつげらかと笑った。

そういえばこういう男だった。少々面倒なことになったと思わないでもなかったが、かつて唯一親しくしてくれた友人を邪険じゃけんにするのは良心がとがめる。

「君は変わらん」と首を振ると、「お前は変わったな」と返された。

「頬の傷はどうした？」

絶句して、狐はその場に立ち止まった。——こいつは、こんなふうに人が一番触れてほしくないとところに無造作に手を伸ばす不躰ぶしつな奴だったか？

「どうかした？」と烏が振り向く。

いや、と言つて狐は烏の隣に並んだ。

「手術で取ったんだ」

文字にすればたった十文字にも満たない台詞せりふを言うのに、何気なく聞こえるよう細心の注意を払った。手術したことをからかわれたら、と身構えたが、烏はそつけなく、ふうん、と頷いただけでもう興味を失ったようだった。

「君はどうしてこつちに戻ってきたんだ？ また父君の転勤か？」

「まさか」と烏が笑う。

「子供じゃあるまいし、もう親の転勤には振り回されんよ。今年の春に大学院を卒業して、大阪

で就職したんや」

自分たちはもうそんな年になっていたのか、と狐は驚いて烏を見た。

「それは、おめでとう、と言うべきなのか？」

「言うべきやよ」と烏は少しばかり妙なイントネーションで言った。

「今は花の独身生活を満喫してる——って言いたいところやけど、実際は仕事に追われて毎日てんてこ舞いや。飲み会がある日以外は、もっぱらコンビニとカップラーメンに頼ってる」

下手な関西弁で話す烏の言葉に対し、「不健康そうな生活だ」と狐は自分のことを完全に棚たなに上げて笑った。

「ま、社会人一年目が一番辛いつて言うし、慣れたら色んなコツも掴つかめてきて、楽になるやろ」

「どこまでなら手抜きしても怒られないかとか？」

「どこまでなら遊んでも怒られへんかとか」と烏。

中学時代から烏は万事要領よくやるタイプだった。そのくせ誰からも疎うとまれたり憎まれたりせず、水中を泳ぐ魚のようにすいすいと、学校という閉鎖的な社会で上手く立ち回っていた。あれは転勤の多い親を持った子供が身につけた処世術だったのか、それとも……、「天性のものなのか」

ぼそりと呟くと、「何か言った？」と烏が反応した。

「いや」と短く否定して前を見る。

「ということ、今は大阪に住んでいるのか」

大阪の企業に勤めているなら当然そうだろうと思ったが、烏は「いいや」と首を振った。

「今は奈良在住」